

高三

石川 雄斗

海は足の下に光る。遮ぎる雲の一片さえ持たぬ
春の目影は、あまねく水の上を照らし、いつの間にか
ほとぼりは波の底まで浸み渡ったと思わるほど
暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流し
たるところどころに、しらかねの細^{ミヅ}魚^{イサ}を畳んで濃や
かに動いている。春の日は限りなき天が下を照らし
て、天が下は限りなき水を湛えたる間には、白き帆
が小指の爪ほどに見えるのみである。しかもその帆は
まったく動かない。往昔入貢の高麗船が遠くから
渡ってくる時には、あんなに見えるであらう。

優良賞

高三

金坂　ことみ

海は足の下に光る。遮ぎる雲の一片さえ持たぬ
春の目影は、あまねく水の上を照らして、いつの間
かほとぼりは波の底まで浸み渡ったと思わるるほど
暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流し
たるところどころに、しるかねの細鱗を畳んで濃や
かに動いている。春の目は限りなき天が下を照らし
て、天が下は限りなき水を湛えたる間には、白き帆
が小指の爪ほどに見えるのみである。―かもその帆は
まったく動かない。往昔入貢の高麗船が遠くから
渡ってくる時には、あんなに見えたであらう。

高三

木村 遥

海は足の下に光る。遮ぎる雲の一片さえ持たぬ
春の日影は、あまねく水の上を照らし、いつの間
かほとぼりは波の底まで浸み渡ったと思わるほど
暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流し
たるところに、しらかねの細鱗を畳んで濃や
かに動いている。春の日は限りなき天が下を照らし
て、天が下は限りなき水を湛えたる間には、白き帆
が小指の爪ほどに見えるのみである。しかもその帆は
まったく動かない。往昔入貢の高麗船が遠くから
渡ってくる時には、あんなに見えたであらう。

優良賞

高三

中川 凜音

海は足の下に光る。遮ぎる雲の一片さえ持たぬ
春の日影は、あまねく水の上を照らして、いつの間
かほとぼりは波の底まで浸み渡ったと思わるるほど
暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流し
たるところどころに、しるかねの細鱗を思ひんで濃や
かに動いている。春の日は限りなき天が下を照らし
て、天が下は限りなき水を湛えたる間には、白き帆
が小指の爪ほどに見えるのみである。しかもその帆は
まったく動かない。往昔入貢の高麗船が遠くから
渡ってくるときには、あんなに見えたであろう。

高三

関根 祐太

海は足の下に光る。遮ざる雲の一片さえ持たぬ
春の日影は、あまねく水の上を照らし、いつの間にか
ほとぼりは波の底まで浸み渡ったと思わるるほど
暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流した
ところどころに、くろかねの細鱗を畳んで濃やかに
動いている。春の日は限りなき天が下を照らし、
て、天が下は限りなき水を湛えたる間には、白き帆
が小指の爪ほどに見えるのみである。くかもその帆は
まったく動かない。往昔入真の高麗船が遠くから
渡ってくる時には、あんなに見えたであらう。

高三

藤田 知也

海は足の下に光る。遮ぎる雲の一片さえ持たぬ
春の日影は、あまねく水の上を照らし、いつの間
かほとぼりは波の底まで浸み渡ったと思わるほど
暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流し
たるところどころに、しらかねの細鱗を畳んで濃や
かに動いている。春の日は限りなき天が下を照らし
て、天が下は限りなき水を湛えたる間には、白き帆
が小指の爪ほどに見えるのみである。しかもその帆は
まったく動かない。往昔入貢の高麗船が遠くから
渡ってくる時には、あんなに見えたであらう。